

M. プライア編 三好洋子編訳

『結婚・受胎・労働』
—イギリス女性史1500-1800—

六 車 進 子

いま、多くの研究領野で、これまで負の価値を付され、正面切って問題とされてこなかったことがらに光があてられ、人類の歴史が大幅に書き直されようとしている。狂気や監獄、鬼や悪魔といった奇怪なもの、異人たち、身体とそれにまつわるもの、さらに夢や無意識等々。子供、そして、女性もまた、そのひとつである。

本学の朝治啓三先生（イギリス史）も訳者の一人に加わっておられる本書は、副題に「イギリス女性史」とあるが、イギリスの王妃や貴族について書かれたものではない。産業革命直前までの、台所、居間、畑、紡ぎ車、織機の前という、ごく身近かなところにいる、ごく普通の女性について書かれたものである。これら人口の半分をしめる女性の、社会（家庭・地域）、経済、政治、宗教、教育、慈善事業等で果してきた役割は、これまで、男性の生活記録や社会経済史、歴史学の中に正当に位置づけられて記述されていない。だが、今日、これらを見無視して、人類の歴史を省みることはできない。本書は、これら女性の活動の、「辛抱強く、組織的」で、「想像力を駆使し」た発掘によって、既存の研究のいっそうの充実を意図しようとするものである。

序章では、本書の歴史的背景として、十九世紀以降のイギリスの女性史研究が、主に、ケンブリッジとロンドン大学とに関係をもつ、庶民一女性の生活に焦点を当てた社会経済史研究を中心に省みられている。

これらは、「産業労働」と「資本主義的組織」の浸透が、そして、イギリスの場合、とりわけ「地方分権的統治と地方社会のある程度の自給自足性」の崩壊が、「家族産業」に立つ「自給自足的家庭」を崩壊させ、新たに私的生活と公的生活—政治・経済・教育の世界—の二極化を生み出し、さらに、この時代、人類の発展に向って開かれてゆく後者の世界から女性が排除され、彼女らがもっぱら従事した私的生活が価値的に卑しめられ、貶置されたことを明らかにしている。

家事の過少評価と公的業務の過大評価とに結びつく女性蔑視と男女の役割分業の固定化は、近代以後の、従って、歴史の浅い観念である。しかし、今日、それは、わたくしたちの身体奥深くにまで染み込んだ固定観念—惰性化され、自明化され、実体化された思い込み（常識）—となっている。日常生活を支える家事労働の繁雑さ（男性の明確に限定された労働の領域を「A」と呼ぶとすれば、女性のそれはその「残りのすべて」、つまり「きり」のない労働、「非A」であるという表現は言いえて妙である）は、女性に余暇を与えなかった。近代の効率性の追及は、この労働の不平等な分配の上に可能であったのであり、この不平等はさらに多くの不平等を生み、人と社会のあり方をいびつなものとしていった、と。

快適に住まいし、衣・食を楽しみ、新たな生命を育み、人との交流を深める、この、手間・ひまかかるが豊かな生の営みの基本にある日常の生活を支えてきたのは女性である。その労働、その労働の意味を正当に評価できなかった、しなかったのが近代である。今日、わが国には慢性的な豊かさの欠乏感がある。その根底には、この近代を短縮して形成した人々の、価値的に貶置された日常—私的生活の蔑視、日常性の無視という、基本的に貧しい生活の原型がありはしないだろうか。それは目的合理性のみを追求し続ける近代が、片隅に追いやられ、置き去りにしてきたものであり、それを、今日、わたくしたちは、なお、忠実に生きているのであろう。この国で、男女の役割分業意識がとくに強固なことも、仕事（公的業務）信仰、肩書（社会的地位）信仰、学校信仰などと深

く関わっている公的生活の優先とあくなき効率性の追求、そして豊かな生を生きる基盤としての日常性—私的生活の軽視と無関係ではないであろう。それは、両性にとって、人としての存在を自ら半分しか発展させていない不幸な事態であろう。今日、日常のくらしが近世・近代初期のそれとは大きく変化している中で、ようやく、男女が、共に、公私の生活全般に目を開き、一人ひとりがそれにどのように関わってゆくかが改めて大きな課題になりつつあることを考えながら、重い日常を一手に背負っていた、近世の普通の女性の生活記録を読み進めた。

第一章は、自分の母乳で赤児を育てる庶民の女性と、乳母に養育をまかせ、多産多死の上流婦人の育児の相違を示し、上流階層の悲惨な習慣の下で、「副業の一形態」として、ひとつの「家内産業」として「乳母業」をもち、収入をえていた一部女性をとらえている。授乳行為のあり方（授乳法）は出生率と深く関わるが（授乳期間は出産を抑制する）、女性におけるその微々たる変化が、イギリスの工業化への過度期における人口変動の重要な要因であったことが示されている。ここで興味深かったのは「授乳所」の存在である。授乳は、必ずしもわが子に限らず、親戚、隣人、孤児、捨て児に対し、さらに成人の病弱者にも行われており、乳幼児の一括養育が大規模に組織されていた。授乳が病氣治療法として廃れていくのは、ここに記されているように、乳房がしだいにエロティシズムのシンボルとなってゆくことと平行していたようである。その背景には、さらに、「乳児にせがまれるたびに乳を飲ませた近世」から、「女性が工場や苦汗作業場に働きにゆくために授乳時間を減らさねばならぬ」になった社会への移行を否定することはできないであろう。わが国では、第二次大戦後、なお、人前での授乳行為はまだよく見受けられた風景であったように思う。

第二章は、「誰かの管理下にいない女性は（家父長制の）社会秩序に対する脅威であった」時代の、1540年から1720年の間のパークシャのアビンドンにおける未亡人の問題をあつかう。ここで、再婚未亡人が、十七世紀に減少したことについて、その理由を検討している。

第一には、家族の財産維持への願望が社会全般に拡まったこと（夫が、遺言状に、妻の再婚に際しての罰則を書き込むようになる）、第二に、女性自身が、相続に関して、子供らの不利になるような再婚を避けたことがある。第三は、女性の雇用への機会が増え、寡婦生活を比較的容易にしたことであるが、これは、産業の動き、労働力の需要、夫の職種等との関係において決して安定したものではなかった。が、少なくとも経済的自立は、「悲惨の極にある貧困に代わる」再婚をさけることを可能にした。第四に、貧民・女性の援助のための公的救済制度や慈善団体が設立されたこと。これは、前章における組織的な「授乳所」、養育所の存在と共に、工業先進国イギリスの、関心をそそられる問題である。第五に、女性の人格上の自由と独立性をうたう自由主義的な新しい思想傾向が生まれてきたこと。それは、既婚女性が「法的、人格的に彼女の夫に従属していた」時代、「未亡人暮らし」こそは、「自分自身を支配する自由」をえ、「自己鍛練」と「自己管理のための能力を開発し」、「男の『特権や卓越性』をも女性に与える」ものと考えた。さらに全編を通して考えさせられた問題であるが、ここでも、宗教が、再婚に関して影響力を持っていたことが示されている。キリスト教は、基本的に再婚に反対であるが、ピューリタンは「夫婦相互のやすらぎのための結婚」という考えに立って再婚を支持した（「性交は母乳の質を低下させるであろうが、夫婦の義務は乳児の幸福に優先すると信じ、教会は、乳母による養育を赦した」ともある。第一章）。後にもふれるが、宗教は、当時、女性の生活全般に重大な影響力をもっていたようである。

第三章では、オックスフォード市における、この時期増加した「余計者の女性」の経済生活を描いて、それが如何に不安定なものであるか、いいかえれば、女性は、経済の好・不況にいかに関心・敏感に順応するように馴されていたかを示している。このことと共に、ここに描かれる当時の男女間の分業のあり方、労働観は、現代のごくありふれたそれらの様そのままである。当時、「男性の優位」は顕示され、「家事に手を出す男」は「めめしい奴」と嘲笑され、男性は「世話され」ねばならなかった。「女性は、あらゆることを同時に処理しなければなら

なかった。このことがまったく認識されないことが、良き秩序にとっては重要であった」と。が、女性は、また、その順応力によって、社会が経済的、政治的に開放的であるとき、職業構造の変化によって生じたすきまに侵入し、新しい職業へのチャンスをつかみ、その育成、発展に大きな役割を演じたのである。これも、今日、わたくしたちのまわりで進行真っ最中のことであろう。

第四章と第五章は、十七世紀における女性の著述活動を取り扱っている。前者は、「日常生活のこまごまとしたことども」や地方や国家の事件について記録したもの、後者は、出版された女性の著作をとりあげている。この、女性の「圧倒的多数が文盲で」「自分の名前さえ署名することができなかった時代」（1640年代、読み書きの能力を持つ男性の比率は36パーセント、女性は10パーセントであった）、それらは上流女性によって実現された。

ここに示されていることは、宗教が、当時、如何に強く女性の生活の基本型を形作っていたかということと共に（23名の記録—作品の四分の三は信仰に関するものであり、「信心深い生活を守ってゆく必要が、女性に日記をつけさせた一般的な理由であった」。それは、「非常に重要な特別の義務」、「立法的な義務」であった、と。第四章）、それが、やがて、女性の社会的、政治的な地平線の拡大の根拠となったということである。

まず、日常の偶然的なできごとや歴史的な諸事件を神の摂理で整合的に解決したいという衝動が、女性に日記を書かせている。今日にくらべ、はるかに「危機的」で、「偶然に満ちた状況のなかで」、それは、女性に「日常生活を生きぬく力」を与えたのである。さらに、日記による「毎日の収支決算」は「神の摂理の解釈」に役立つだけでなく、「精神の排泄作用」、つまり、自分の「些細な過失を大げさに罪と表現」、「告白」することによって、「それと縁を切り」、「その日の精神の勘定書を清算」するのに役立つのである。

十七世紀、女性の信仰心が特別な関心をもたれていた時代であるが、書き残されたものの中に、また、当時の上流女性の家庭生活の日常をうかがい知ることができる。「毎日たいてい二回か三回行われた標準的な勤め」（私的な祈禱、

聖書を読むこと、数時間におよぶ神への瞑想、罪の告白など)、使用人の監督、荘園や所領の雑務万般、酪農・醸造の仕事、会計簿の点検、これらの手すきの時間には針仕事、家事万般、読書、社交的時間などに女性は従事した。彼女たちの質量共に膨大な世俗の仕事の遂行は、早起きと六時間の睡眠が可能にした。

性が「生活の基本型をつくるうえで、階層よりもいっそう重要」であった時代、女性の日常生活の相違は年齢や結婚状態によっていた。女の一生は、「気楽」な「娘時代」から「妻にふさわしい服従を強化する」宗教的教訓と社会的強制の下での妊娠、出産、病気、死やつらい社会的役割を生きねばならなかった「結婚期」、そして「経済的窮状」に投げこまれることもあったが、「出産の苦労や妻としての服従の苦しみから解放されて、明らかに自分の思うままに行動するようになる」れる「寡婦期」に明確に分けられていた。

「結婚期」において、宗教は、「妻にふさわしい服従」という観念と「結婚生活の伝統的な社会的役割を強制する傾向」を持っていたが、それは、さらに、「結婚生活の欠陥を補うために信仰生活に心を向けさせる女性」を生んでいた。つまり、「信仰という行為が夫に代わるものを妻に提供」したのである。彼女らは、「神への感情的な没入」から「神の愛の情熱的な『興奮』や『情火』に関する数多くの体験を書き記した」のである。また、出産は「共同社会のできごと」であり、女性らは「分娩中の女性を一生懸命励ますため」に集まり—「社会的産褥の集まり」、「分娩中の女性の恐怖を公平に分」ちあっていた。十七世紀、女性の私生活の世界と男性の公的生活の世界とが明確に分離していた時代、男性の日記には、階層や職業、それらに伴う雰囲気の違いが歴然としているのに対し、女性のそれは、いずれも、世帯やその成員のこととできごととに集中している。

女性が出版のために著作するようになるのは1640年以降のことである。ここでも、十七世紀の女性観が、著者である女性に与えた影響が考察される。ピューリタン革命、共和政の時代は、女性の出版活動にとって決定的な時点と

ある。それは、内乱によって、女性の生活全般への責任が大きくなったこと、政治的内乱の紛争に参加するために自分の論証に研きをかけねばならなくなったこと等による。十七世紀、名前を記した231名の女性が653冊の本を出しているが、22名がその半数を出し、それは主に貴族やジェントリ出身の女性である。十七世紀、女性と男性とが別の世界の者と考えられていた時代、著作する女性は「男性の特権」への「侵害者」であった。

このような、読者の大部分もまた男性である時代、女性は同性の読者を比較的つかみ易い宗教書を手掛けた。それは、さらに、宗教書が、女性にふさわしいと思われる主題を扱うことによって社会的批判を免れえたことと、聖職者が、常に「女性に自分自身の救いに責任をもつようと励まし」、教会も宗教的体験を重視し、その出版を間接的に奨励していたことを背景としている。当時、「夫は、妻の肉体的、世俗的事柄を支配する権力をもったが、妻の良心を支配する権力はもたなかった」といわれる。宗教は、女性の著作活動に「自主の領域」を与えると同時に、やがて「伝統的な行動規範に公然と反抗する」根拠を与えていく。女性は、社会的に強要されていた「無口なつつしみ深さ」というあり方を変えることを、「神の恩寵を伝えることが女性の美德を奪うはずはない」として擁護し、自らの著作活動の「無実の実証を、神にゆだねた」のである。

宗教的著作の他に、調理法、母性愛、実用的な助言、治療的知識、婦人科的アドバイスに関するものがあつた。日常生活の知識に関して「女性は互いに頼りにし合っていた」のである。その内容に保守的なものもあつたが、女性が自らの考えを公刊したいという行為のもつ「急進的」な側面は見逃せない。著作は、やがて、十七世紀後半から社会情勢への批判、女性の、男性との平等な政治的権利への主張にむけて拡大していった。ここでも「政治的活動は、『女性が、神および教会の大義にたいして負う』『義務の一部』とされ、彼女らの主張の典拠は聖書にあつた。「神は人を差別しないかたです」という信念に立って、政治的請願は、「神のみわざ」とされた。女性活動家たちは、ときに、「保守的観念を急進的目的に合わせていいかえる方法を習得しつつあつたのであ

る」。

やがて、時代が直面している組織的な社会的不平等は、男性によって人為的につくられた制度（「慣習と教育の欠如」）にすぎないと記されてゆく。男性は、女性を、「人間社会の繁殖とそこに住む人びとをいつも楽しく清潔にしておくためにだけ存在するものだと考えがちである」と。今日にくらべ、はるかに手間・ひまと力を要する家事は、当時、女性にとって「かならずしも魅力ある領域ではなかった」。家事は、「自分の発達を妨げる『下等な仕事』」、「奴隷の家の退屈な管理」として認識されていく。

全編を通して、女性における宗教的観念の影響力の大きさを知らされる。ここでは詳しく触れられていないが、それは、恐らく、労働—経済活動、慈善事業やがては教育とも深く関わっていたことであろう。それは、イギリスにとって自明のことであろうが、わたくしたちにはそのプラスとマイナスの検討は興味深い。また、本書は「一つの階層としての男性」に対する女性の生活の記録であるが、わたくしたちは、過去の下層の女性の生活についてはほとんど知りえていない。この問題は、今日、そして今後、焦点をあてられるべき問題であろう。

200年以上も前の、ごく普通の女性の日常生活が、その機械的合理化を除けば今日の女性のそれとほとんど変わるところのないことを改めて知らされた。わたくしたちが自明としている意識・観念の内、文化によってつくられていない部分はないほどである。「父子関係の情のような、人体のなかにすでに刻み込まれてしまっているようにみられる感情でさえも、本当は制度なのだ」（メルロ・ポンティ『知覚の現象学』）。このことを知っているか、知らぬかでは、世界はちがってみえてくるであろう。歴史が動くか動かぬかである。ことの生成とその惰性化を知ることは、また、さらに、いま・ここを異化し、新たなこと成り（異なり）を実現してゆく力である。本書は、そのために加えられた一書である。

最後に、本書の魅力のひとつは、執筆者の何人かは主婦業と母親業を卒業して学問を志した女性だということにもあろう。それは多くの女性にとって大き

『結婚・受胎・労働—イギリス女性史1500-1800』

な励みとなるにちがいない。願わくば、200年以上も前の、しかも異国の女性史により想像力を掻き立てられるよう、もう少し図版や写真を多用し、文章も思い切って平明化されたらどうであったろうか。